横浜における プロレタリア文化の系譜

文化創造のにない手たち

特集 3

斎藤秀夫
<労働運動史研究会会員>

1

荒畑寒村は昭和34年10月24日横浜市立図書館で行なった記念講演で，つぎのように語っている。

「その時分 <明治30年代> は外国資本と競争する自由があった。ですから，競争して富を築いて行く進取の気性が，横浜には溢れていました。したがって，横浜市民の間には進取敢為の気性が非常に旺盛であったと，私は思うのです。戦後の軍事的な支配のもとにおかれていた横浜は，絶対服従でそれと競争するなどという余地はなかったのですから，その点では昔の方が，たとえ外国資本の制覇のもとにおかれていたといっても，市民の意気精神が非常に違っていたと思うのです。……封建的な時代の風俗習慣が，まだたくさん残っていた横浜。治外法権がしかれていた横浜。貿易の実権が外国の商社に握られていた横浜。私が少年時代を過したそういう時代の横浜にも，日露戦役の初めには海岸教会に属する3人の青年信徒の中から，社会主義運動の組織が生まれるようになったのであります。〝波濤のうつところは文明の興るところなり〟と，ある史家が申しましたが，世界の波がおし寄せる横浜に興った文明は，いかなる古い権威も防ぐ力がないと見えます。今日の横浜は，昔の横浜とはほとんど隔世の感があるくらい，非常に変化いたしました。殊に最近の戦争の結果は，旧横浜を亡ぼしたといっていいかも知れません。しかし磯子の海岸が埋立てられて近い将来に大工業地帯になるという話ですから，そうなったら，横浜はその規模，内容において夢想だも出来なかったような大発展をとげるでしょう。そうして，その物質的基盤の上に，新しい文化がおこるに違いないと考えます。」<横浜市図書館『郷土よこはま』19号>

引用が大分長くなったが，明治，大正，昭和を，社会運動者として生きぬいた荒畑の指摘には，私

どもを考えこませずにはおかないものがある。この日，荒畑は夫人同伴で早くから野毛，伊勢山と散策，目のあたりにした横浜の変容を実感こめて語っていた。講演が終ると，会場にかけつけてきていた，今はない横浜平民結社以来の吉田只次，今は病床にある売文社時代の石井鉄治など，横浜在住の旧友と遅くまでかたり続けた。荒畑の目にうつった〝亡ぶべきもの〟と〝おこるべきもの〟を，私は，私なりに，横浜における〝プロレタリア文化運動〟のあゆみのなかに探ってみたいと思う。

本誌の中心テーマである「横浜文化論」からははずれるかもしれないが，現状の上にたって，あれこれ体制いじりをするよりも，横浜という「都市」の今日にいたる歩みの中から，あるべき姿，それを支える層を求めるほうが，迂遠のようでも，〝可能性〟を組織することになるだろうと考えたからである。

2

「文化」についての定義はともあれ，今日の支配的文化が，支配者のものであることは，〝古典的マルクス主義者〟たらずとも認めざるを得ない。マス・メディアの発達はとくにその感を強くさせる。マス・プロ文化が大衆の生活を規制している。いまや，国民文化も中央文化もなく，東京文化も周辺文化も存在を許されない。あるものは，ただ「資本制文化」の支配である。

こう断言することは，かなりの抵抗を生むことである。現に，私の親しい〝プロレタリア文化人〟の中ですら，〝戦前のプロレタリア文化運動は不毛だ〟〝芸術の非政治性〟などについて，一歩もゆずらない人びとも少なくない。私自身，〝文化〟や〝文化運動〟の歴史を必ずしも専門としているわけではないから，これらの反論に，明確に論証して解明するほどの資料，あるいは研究の蓄積があるわけではない。しかし，複雑で，錯綜している〝文化〟問題であり，〝都市文化〟の問題は，実は，こうした，単純化，図式化のプリズムを一度とおして，歴史的に，また社会的にとらえてみることが，有効ではないだろうか。

かつて，東京区裁判所検事重富義男は，昭和9年夏，司法研究第2部第9回研究員として，「集団的暴力犯罪の原因」と題する自由研究を発表し，主として神奈川県下に於ける事犯について考察をすすめている＜司法省調査課『司法研究』第19輯報告集5，昭和10年3月＞。

この研究報告は，今日，興味深い事例報告とともに，治安官僚が，神奈川県民をどのように把握していたかを知る貴重な資料であるが，重富は「県民＜農民＞は容易に感情に支配せられて徒党を組み多分の騒擾性を持つ」と判断している。さらに労働人口の増大は，「夫等の労働者を階級的に組織し資本家の勢力に対して労働条件の維持改善を擁護せんとする労働組合数も……全国第4位にあり，加入組合員数に至っては……全国中圧倒的多数を制している。加うるにこれ等の組合は我国政治運動の中心たる東京に接続しているため，組合本部よりの指導統制に服するに便である等の事情から，県下に於ける労働運動は頗る活発である。」＜同書P.25，84～85＞

権力の主要構成部分たる検事が，県民の特性を判断するにあたって，労働者と農民をとりあげたことは注目すべきであろう。被支配者を代表するものが，労働者，農民であることが，支配者の側からは把握され，被支配者の側で〝県民〟〝市民〟として抽象化されるなら，果して，被支配者の側の主体性は確立されるであろうか。〝文化論〟についても，支配階級の文化に対置して，被支配階級の文化が検討されねばならないであろう。どんなに圧迫された民衆であろうとも，それ自身の労

働，衣食住の生活文化をもつことなしに，生存と生殖は不可能であり，圧迫された民衆が自ら組織をつくりあげる過程で，支配階級とは異った基盤の上に自らの〝文化〟を創造していくものである。

3

マス・コミュニケーションの発達した現代といえども，文化の基本は生産であり，イデオロギーの基盤は「読み」「書き」である。プロレタリア文化の創造にとって，「読み」「書き」を組織する活動は，いつから開始されただろうか。

日本におけるプロレタリア文化の形成も，前史段階は一部の先進的知識人による新聞の発行を萠芽としている。明治の自由民権運動は，明治11年の日刊紙郵送部数が，およそ75戸に１戸<全国平均>の割合であったといわれ，都市部ではより高い比率であることは想像にかたくない。この日刊紙が持込んだ民権思想は，後年の社会運動につらなるものであり，これら有名，無名の新聞には，寄書欄があって，読者の投稿が求められていた。

日本における労働者階級の新聞は，明治30年12月１日片山潜を主筆として発刊された『労働世界』が最初である。片山，高野房太郎や，島田三郎などの開明的ブルジョア・イデオローグの論説と並んで，第１号から労働者自身の書いた投書が掲載されていることが注目される。同紙は文芸欄をもち，さらに「葉書倶楽部」の欄を設けて，労働者自身の「書く」能力を意識的に組織していった。同紙は，鉄工組合，労働組合期成会の準機関紙であったが，組合員，会員に定期に，組織を通じて配布されていたことに意義がある。さらに，鉄工組合も，期成会も，「話す」ことに労働者をひきこんでいった。否，話すことこそ，出発点である。鉄工組合第三支部，第十七支部は，いずれも県下に組織された数百名の支部であるが，主要な宣伝の機会は演説会であった。演壇には名士と並んで労働者が立って訴えた。両支部とも事務所をもち，事務所は「労働倶楽部」として，新聞，雑誌，図書などをそろえた。労働者は，そこで知識を磨いていった。親しみやすいものとするために，第三支部<横浜>では，階上を共働社<今日の生活協同組合>の売店とした。横浜ドックの青年労働者有馬万次らは，青年団を組織し，テーマを定めて討論会を開催したりするに至った。

この系譜は『平民新聞』をはじめとする，明治後期の社会主義新聞の各種につながっている。さらに，明治43年，いわゆる大逆事件で冬の時代を迎え，大正元年，友愛会が発足，『友愛新報』<大元. 11.3創刊>を発刊すると，同紙は『労働世界』のスタイルを完全に踏襲しながらも，読者＝会員の投稿を意識して組織し，総同盟機関紙として発展していくなかで，より広汎に，懸賞という形で労働者の「書く」能力をひきだすことに成功していく。

いわゆる古参社会主義者の一群も，並行して，文芸誌『近代思想』を創刊し，あるひは綜合誌『新社会』を発刊する。新社会の誌上からは，N<根岸>正吉，伊藤公敬らが育ち，近代思想には，「夏」「冬」等の傑作をひっさげて〝文学者〟荒畑寒村が登場する。日本最初の労働詩集『どん底にうたふ』が，スマートなポケット版で登場するのは，大正９年５月１日，全国にさきがけて，横浜の沖仲仕同盟会が「万国労働祭」を挙行した日だった。著者は伊藤公敬，根岸正吉。

個人の感懐や生かじりの思想の受売りが，これらの機関紙誌をにぎわした時間は，極めて短かかった。ロシア革命以後の社会主義機関紙誌，労働組合機関紙誌には，職場や労働者の闘いの実態が，事実を事実のままとして伝える「ルポルタージュ」形式が登場する。頂点には，『女工哀史』。

横浜市内の労働者が，機関紙をもったのは，現存する限りで，メーデーと同じく，仲仕同盟会『団結』が，最初のことである。大正10年・『団結』には，宍戸錠治，山上房吉ら仲仕出身の「書き手」が育ちはじめた。労働組合に加入してきた労働者は，同時に通信員でもあった。

『団結』までの年代で，サンジカリズムはその使命を終った。大正13年，市内には昭和初頭を飾る主要3労組＜市電共和会，横浜船渠工信会，横浜合同労組＞が続々と結成された。『共和』『工信会報』が，定期的に刊行されるようになった。横浜合同労組では，毎週土曜日，青年を集めてマルクス主義の教育が行なわれた。オルグむきとアジテーターむきの素質にもとづいて，青年にはそれぞれに適した教育法がとられた。アジテーターは，磯子の海岸に連れて行かれ，演説の稽古をさせられ，声をつぶしては，独特のシャガレ声，ハリのある声，大衆をふるいたたせる話術の実地訓練をうけた＜マイクのなかった時代である＞。そして，青年たちには，「給料の十分の一は本を買え。ガサ＜押収＞られてもガサられてもガサられても本を買え。今は読めなくても，きっと役に立つ」と教えこんだ。

翌年，日本労働組合評議会が結成された。評議会の機関紙『労働新聞』と，その教育宣伝活動は，京浜の労働者に大きな影響を与えた。大正15年秋から，労農党の結成が，川崎，横浜，湘南とひろがり，地下の日本共産党の細胞結成も進んだ。昭和3年，『走旗』が，いかにも素人くさい謄写版印刷で2月1日に創刊された。県下の各工場細胞も，中央機関紙に学んで，『工場新聞』を次々と発行していった。その印刷技術は低く，発行部数も極めて少なかったが，京浜の労働運動にとって，重大な転換点であった。労働者は検閲を考慮せずに，自由に「書き」，発禁を恐れずに「読む」みずからの文化手段を，はじめて，労働者自身の手で持つに至ったからである。

3・15の弾圧，4・16の弾圧は，こうした芽を根こそぎうばおうとするものであった。しかし，3・15の直後に『戦旗』が創刊され，プロレタリア文化は急速に拡がりはじめた。新人があいついで登場した。昭和5年4月，『戦旗』は蔵原惟人の論文「ナップ芸術家の新しい任務」を発表，芸術の大衆化が主張され，大きな影響を与え，労働運動の分野では，再建された左翼労働組合「全協」が計りしれない根づよさで，地下に拡がり，昭和6年9月，「満州事変」をむかえ，新しい運動の展開にせまられていた。

4

労働者は，闘いのなかで，みずからの運動を指導する理論を体あたりで消化していった。小学校3年中退，強度の近眼，1年の大半はブタ箱住いの一青年労働者は，読める仲間に文献を読んでもらい，知らない漢字にルビをつけ，国語辞典をひきひき読む，という形で，文献を読み続け，『資本論』を読むまでになっていった＜神奈川旧友会刊『坪内嘉市小伝』昭和39年4月，40年6月改訂版＞。昭和7年。プロレタリア文化運動が，積極的に当面の政治的課題をとりあげ，反帝，反戦，反失業闘争に起ち上ることによって，弾圧につぐ弾圧をもって明けくれた年である。共産党，全協の影響力も，万をもって数えるに至っていた。「花ひらく文化運動」とうたわれる拡がりが，横浜にも展開されていった。1月31日には，森栄一の主催する労働学校の生徒や，本庄勝＜山田今次＞，島田宗治＜望月初男＞らによって，前年末に結成された「横浜青年劇場」の結成記念公演が禁止され，メーデー公演を伊勢佐木町電気館に用意したものの，稽古中の劇団員20名近くが2，3日前に総検束されて上演不能というありさまだった。